



梅島小だより

「言葉は耳に届かせるものではなくて、心に届かせるもの」

校長 江原 敦史

かつて聞いた話の中で、「言葉」について心に強く残っていることがあります。
断片的な記述で申し訳ありませんが、紹介させていただきます。

音というものは、聞こうとしなければその音は存在せず、聞き流されてしまう。
聴きたいという意志をもつことで、はじめて聴こえてくる。
自分にとって大切なこと（大切な他者という存在）がなければ、「聴く力」は育たない。
赤ちゃんは、自分にとって大切な声に対する集中力をどんどん増し、ついにある音が意味をもっていることに気付く。これが、言葉の誕生。
愛してくれる他者がいなければ、人間の言葉は生まれてこない。
子どもの「聴く力」は、「大切な他者」がいることで育つ。
子どもの「言葉」は、「大切な他者」がいることで育つ。

（乳幼児の）言葉は、心の通い合う関係性の中で育ってくるのを待つしかない。

子どもが乳児から幼児になる過程で一人の他者と会話ができるためには、3つの要素が子どもに出来上がっていく必要がある。その第一の要素は、「自分でない他者と視線が合うこと」である。

（現代の便利な世の中では）言葉が通じ合うが故に、本当の意味でお互いをわかり合うことが逆にできにくくなってはいないか。

「待つ」とは、子どもの発達力を信じること。「見えないもの」に目を注ぐこと。
「待つ」とは、子どもを操ろうとしないこと。「徹して聴く者」になること。

今の自分は果たして、
「子どもの心に届く言葉を使えているか」
「心の通い合う関係を子どもと築けているか」
「視線を合わせて子どもの話をじっくりと聴いているか」
と振り返ってみると、そのどれもができていないと思いました。
子どもたちと毎日交わす「おはようございます」の言葉一つも、大事にしなければと思いました。